

# 第3回初級養成講座 講座概要

## 2.須走には世界遺産「富士浅間神社」がある！この魅力を伝えてみよう！

### 第1部 富士浅間神社・合目の神社

■日時：平成29年12月10日（日）13時～16時15分

■場所：富士浅間神社 社務所

■講師：石橋 良弘（富士浅間神社 祜宜）



#### ■講義概要

- 須走の神社だけではなく、神社、神社神道とはどういったものなのか？を話す。
- 神社で働く者を神主、神職とも言い職業名である。一般的な会社で例えると宮司は神社の一切を取り仕切る社長で、眞宜は社長を補佐する部長、権眞宜は宮司・眞宜を補佐する一般社員である。

#### 1. 富士山の中の浅間神社

- 富士浅間神社と他の浅間神社は基本的には同じ。富士宮市の富士山本宮浅間神社を総本宮で、富士山が見える所に多く分布し、全国で1300社鎮座している。関西・九州には存在しない。浅間神社の神様、木花咲耶姫命はもと九州の酒の神様。神様は九州にいるが、浅間神社とは呼ばない。
- 山梨県富士吉田市=北口、須山=南口、須走=東口という。西口は富士宮の浅間大社が相当する。一番大きな浅間さんなので、昔から大宮口として親しまれてきた。地図で見ると、東西南北に散らばっていない。頂上に登った段階で、登山道がどこに出ているか判断する。
- 浅間神社と他の神社との違いは、お祀りする神様が違っている。富士山に關係する神社は浅間神社。八幡神社は八幡さん、稻荷神社はお稻荷さんをお祀りする。
- 神社本庁に登録されている神社総数は8万社を超える。その頂点が伊勢神宮。外宮、内宮があり、一般的に外から入り内に行くが、どちらからお参りするか決まっていない。あいまいな所が神社らしい。
- 一番多い神社は八幡宮で、稻荷神社、諏訪神社などがある。

#### 2. 神社の作法

- 参道は左側に手水舎がある所は左側通行で、右側に手水舎がある場合は右側通行となる。伊勢神宮の内宮の手水は右側にあり、五十鈴川が参道に対して右側にあるので右側通行となる。
- 参道の中央は神様の通り道、神様の正面にあたるので、恐れ多いことから真ん中はできるだけ避ける。

横切るときも少し頭を下げていただくのが一番きれいな作法である。

一手水舎で手を清める。やり方は資料に書いてあるが、必ずしもこの作法通りでないわけではなく、真心を込めて手を清めれば良い。

ーお参り作法は通常は二礼二拍手一礼。鈴を鳴らすタイミングや御賽錢を投げるタイミングを聞かれるが、記載してある作法が必ずしも正しい作法ではない。それぞれの神社、地方のルールがある。一般的にはまず、小さく一礼し、鈴を鳴らして神様に来ましたよ、という合図をする。神様がお顔を出されるので、そこにお供え物、御賽錢を投げる。そして二礼二拍手をする時に、自分のお願ひごとをする。なければ無心でお参りをする。それが終わったら小さく一礼をし、その場を去る。

ー玉串の作法も、必ずしもこの通りではなくても、真心を籠めてお参りすることに意味がある。

ー氏神様、お神札の祀り方については、資料の通りである。

### 3. 神社神道は日本のなかで自然と身に着ける自然崇拜、祖先崇拜、成長儀礼

ー宗教とは、教祖・教典・教義の三大要件を満たす。神社は宗教なのかというと違う。

ー天皇陛下が頂点にいる国家だが、陛下が直接何かをしてくれるわけではなく、天皇は教祖ではない。

古事記は神話が書かれている歴史書で、教典ではない。縛られない宗教が、神道である。教義は、誰かに教えてもらい学び、実践するものであり、神道は自分で自分を研鑽、努力しなければならない。自分を高めるための教え、宗教と考えてもらえばいい。

ー神社神道とは道であり、自分を高めるためのもので茶道・華道・剣道などと同じ。

ー例大祭、新嘗祭、厄払い、お宮参りは宗教的な儀式ではなく、成長等を神様に報告するという人間の自発的な行動で、日本民族の昔からの習慣。自然崇拜・成長儀礼・祖先崇拜。日本では昔から亡くなつた方は遺族をお守りする守り神になると考えられてきた。神仏問わず大事にされてきた。この3点を中心しているのが、神社神道という一つの宗教。

ー江戸時代まで神社ごと作法の違いがあったが、明治に神道を日本の宗教にしようという政策があり、宗教的整備が行われ、二礼二拍手一礼、玉串拝礼作法が整ってきた。来年平成30年は、明治維新150年なので、比較的新しい宗教といえる。

ー靖国神社は、神主の作法が違う。通常、祝詞をあげる時、二礼してから祝詞を読むが、靖国神社は二礼二拍手してから読み上げる。戦前作法が続いている。昔からの風習を大切にしている。

ー日本が軍国主義になったのは、神道のせいだ、天皇のせいだ、神社のせいだという話があり、占領軍によって神道指令=神社を解体する政策が取られた。その時、国家機関だった神社を解体する事になつたが、神主や氏子が協力して「神社本庁」という組織を立ち上げ、今に至る。

ー神社本庁に加盟している神社が8万余ある。行政上トップは神社本庁。神道としての教えは、伊勢神宮がトップである。

ー戦前戦中の神道を「国家神道」と呼ぶがそれは戦後つけたもの。戦前の神社が別に悪いものではなかったわけではない。

ー神社神道は大きく3項目①自然崇拜②祖先崇拜③成長儀礼。神道は山や海、太陽や風など神羅万象に神様が宿ると考えた宗教。日本人は農耕民族で四方を海に囲まれた海洋国家。自然を大切にするというのが強い民族。自然の恵みは神様からの贈り物であり、これに収穫の感謝のお祭り、農耕を始める時の豊作のお願い等お祭りをする。新嘗祭や祈年祭など大きなお祭りになる。

ー一方で、津波、台風、土砂災害など自然災害も神様のお怒りと考え、神様の怒りを鎮める意味もある。

浅間神社はその意味合いが強い。802年に富士山が爆発し、それを鎮めるために現在の場所で鎮火祭の神事を行った、噴火が無事に収まり、神様に感謝をするために最初の祠を建てたのがこの神社の始ま

り。神様の怒りを鎮めるための神社であった。

ー②祖先崇拜は先祖様を大切にする慣習。神道では、古来から亡くなつた方は、家族や子孫の守り神になると考えられてきた。

ー③成長儀礼 安産・初宮・七五三・厄払い・還暦などは、古来から重要とされてきた人生の節目。七五三は何で七歳・五歳・三歳なのかというと、昔からこの年位になるとだいたい良くないことが起こる、とされてきた。厄払いは、女性なら体に異変が起こる年、男性は地域に貢献する年を厄年としていた。昔は役年と言っていた。役人の役、役に立つの役で、必ずしも悪いことが起こるわけではない。節目の年でもあるので、人生の節目・過程を大切にするというのが、神道の考え方である。

ー富士浅間神社の主祭神は「木花咲耶姫命」、一緒にお祀りしている相殿は「大己貴命」「彦火火出見命」。

ー神様はお一人なのにあちこちの神社があるのはなぜかと聞かれる。神様はお招きするもの。我々が見えない高い所にいらして、そのお力を呼びびする。地鎮祭がそうだが、お祭をしている場所に来て、終わったら帰ってもらう。神社であれば来ていただいてずっと残っていただくのである。

#### 4. 東口本宮富士浅間神社の特徴

ー木花咲耶姫命が浅間神社に祀られている歴史的な背景は神社によって異なる。当社の場合、木花咲耶姫命は富士山を鎮火する神様。大己貴命は出雲大社の大國主命の別名で国土復興の神様。富士山の噴火で被害を被った須走の町を復興するための神様という形で一緒にお祀りされている。

ー彦火火出見命は木花咲耶姫命の子供で、富士山を鎮める神様であるのと同時に山の神様、農業の神様で、大己貴命が復興してくれた国土を一生懸命農業・産業を興すための神様である。復興ありきの神様が3柱、総称「東口本宮富士浅間大神」が須走の浅間神社の特徴。

ーそれぞれの浅間神社はまた神様の意味も違うし種類も違う。富士山そのものが神様、浅間大神と言う人もいれば、山頂の噴火口と考える方もいる。

ー現在は神社神道の立場で新嘗祭、例大祭・開山祭・閉山祭など諸祭儀を行つてゐる。創建年代は一応、802年の噴火に対応して、807年に最初の神社が建つたと言われてゐる。

ー須走口は室町・戦国時代から文献にある。最初から富士山鎮火の神社で、登山道のための神社ではない。浅間神社が関東に多く、富士講の方も関東に多い。甲州街道を通つて北口を利用するか、鎌倉往還を利用して東口に入る。神奈川方面から富士講の方が多い。由緒書きにはないが、弘法大師が修行した神社と伝わつてゐるそうだ。江戸時代までは、弘法寺浅間宮と呼ばれていたそうだ。

ー富士山を守り、須走の氏子を守る神社で鎌倉往還 駿河と甲斐の国を結ぶ交通の要所でもあったので、交通の神様とも考えられる。色々な顔を持つのが特徴の一つである。

ー鎌倉往還の宿場町なので旅館が多く、これに付随して、富士講のお世話をする御師の家が多いと考えられている。吉田は、御師住宅という独自の建物で富士講を招き入れていたが、須走は旅館主が御師であり、旅館に招き入れた。現在、須走口で旅館をされている方は、御師の末裔である。

ー先代の小松宮司は、神主であり、九合目・迎久須志神社の山小屋小松屋を運営する御師の家柄であった。地域に根差した神社もある。

ー須走の浅間神社と登山道に関連する神社の大きな違いは、現在の5合目 古御嶽神社、4合目 御室浅間神社、2合目 雲霧神社、6合目 胎内神社、9合目 迎久須志神社、登山道脇道の野中神社をいまなお所有していることである。

ー2合目の雲霧神社は富士山という修行の場所と下界の境になつてゐたと考えられている。

ー4合目の御室浅間神社は女人禁制の山だったが、ここまでは女性が登つてよい場所だった。

ー須走口、山頂には久須志神社があり、これをお迎えする神社として9合目に迎久須志神社が鎮座され

ている。迎久須志神社は江戸時代までは、須走の神主さん山小屋の方が登って管理していた。山梨はルートがあったが、使えなくなったので須走口に合流した。江戸時代の裁判帳に富士宮の浅間大社と頂上の賽銭の取り分を争ったことが書いてある。山小屋を新しく開いていいか、という権利についても触れられている。頂上に山小屋を開く権利は、今持っている富士宮と須走の方だけ、山梨の方が頂上に開きたいと言うのを蹴ってくれという記載があり、山梨の人が経営する山小屋がない。8合目以上は富士宮浅間神社の境内地となる。

—9合目の迎久須志神社の荒廃が進み、建て直す話もあったが、現状では建て直さない方向になりつつある。歴史的な物は後世に語り継ぐのは難しいが、手間がかかるからやめてしまうのは簡単なこと。個人的には何とか神社を建て直したいと思っている。

—明治期の神仏習合に伴い、葬儀も神式となり、国の宗教が神社になったので変わったと言われている。

須走口の一つの特徴である。昔、この神社が県社だった時、神主は神葬祭をやってはいけないという決まりがあった。その時に扶桑教の人が神式のお葬式をやってくれた。裏の登山道辺りに扶桑教の教会があったと言われており、地図を見ると東口教会所があるが、どの辺かははつきり分からぬ。昔から富士講の方と由縁があったという場所になる。

—境内の特徴は資料を付けてあるので、読んでいただき活用してほしい。

—「神拝詞(しんぱいし)」というのをお配りした。大祓い式の時に大祓詞を読みあげる。祓詞は、一般の方が読むための物。神棚などに丁寧にお参りしたい時に読んでほしい。

—富士講の石碑群は、70～80ある。富士講の人の名前と登った回数が書いてある。一番多いのが和歌山の方で899回。本当に899回登ったかと言われると、分からぬ。富士山は申年に登るといつもより縁起が良いと言われている。60年に1度の申年、庚申では、1回登れば、33回登ったご利益があると言われている。これを使ったのではないかと言われている。

—申年の由縁は「申年の申の日に朝起きたら富士山ができていた」そうだ。申年に生まれた山なので猿が特徴になったと言われている。サクヤヒメの御使いの動物も猿で、猿にご縁がある。